

かささぎ通信 第74号

2018年 11月 9日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一八年十月の「森三郎の作品を読む会」では

『森三郎童話選集かささぎ物語』（1995年、刈谷市教育委員会

所収の「虹の松原」（『赤い鳥』昭和7年6月号初出）、

「目ぐすり」（『赤い鳥』昭和7年3月号初出）を読みました。

「虹の松原」は、偶然目にした虹の精の娘を嫁にと願った青年が、人間の世界に生まれ変わった娘を探し出して、嫁にする話です。右の目の下の小さな薄青いほくろだけを手掛かりに、常陸の国を出発し、日本中を探し回って十七年後に肥後の国でその娘をみつけ、常陸の国に戻り、むつまじく暮らします。かわいい男の子にも恵まれ、ふとした気の緩みか、真実を話してしまうと、虹の娘は子どもを残し、空へ帰ってしまいます。

この話には物語の成り立ちを紐解くような様々な要素が含まれています。『常陸国風土記』には「童子女の松原」の話や「白鳥説話」の断片が載っています。森三郎の「虹の松原」が常陸の国の話になっているのと関連がありそうなきがします。また、地上に生まれ変わった娘は、顔に墨を塗られてその美貌を分らないようにされていました。民話の「継子いじめ」の話、「灰かぶり」の要素を持っています。青年が娘を探す旅をする過程は、森三郎の「かささぎ物語」『赤い鳥』昭和6年12月号）の結末部分とよく似ています。しかもこの話は「今のはみんな夢だったのか」と終わっていて、三郎の「夜長物語」（『赤い鳥』昭和7年2月号）と同じ終わり方です。中国の天女の話にヒントを得た「かささぎ物語」に対し、日本の「風土記」の舞台から構成した天女の話「虹の松原」というように、この当時の三郎さんの創作意欲が面白いように高まっている気がします。

なお、三郎の「虹の松原」発表の六年後に刊行の『岩樟舟夜話』（中村忠一、高志社、昭和13年）の中に「虹の嫁」と

いう、三郎作品と同じように右の目の下の青いほくろを手掛かりに嫁を探し出す話が載っています。

「目ぐすり」も、伝説や昔話の動物報恩譚の要素を持った話で、刈谷の「恩田の初連」という目を患った狐親子の伝説が元になったと考えられています。七右衛門さんは「こんなやぶの中に家なぞがあるわけもない」と思いながら進んで行って、狐の親子に化かされます。でも七右衛門さんのお陰で目薬を買うことが出来た狐の母娘は、たけの子や花、栗や松茸をお礼として七右衛門さんの家の戸口に置いていきました。

兄の森銚三は、子供のころに、母狐が病気をして「子狐が、人間の子供に化けて、暗い夜を、本町の生菓屋へ、菓を買ひに来た」という話を聞いた経緯を語っています（『森銚三著作集続編』第十五巻二一九頁）。かつての本町の角には明治初期創業の生菓屋があったようです。「目ぐすり」からは、まだ百年くらい前の刈谷の町の様子が窺われます。

「読む会」の当日、会員の中から、子供の頃には夜だけでなく昼でも人家の少ない道を通る際に怖くて、人家の無い竹藪道を通る時には、走って通り過ぎたものだという体験談も出ました。

森三郎の「ジャンケン橋」（初出『帽子に化したクロネコ』一九四九年）でも、夜更けに通るとジャンケン坊主が出るという橋を、怖さに負けないうようにありつたけの声を出して歌いながら通って、お医者さん呼びに行ったことが出て来ました。「ハーモニカ」（初出『赤い鳥』一九三三年十月号）でも、夕方村はずれのお医者さん薬を取りに行くために竹藪を通らなければならないので、怖いのを忘れようと大きな声で怒鳴りながらその道を抜けたと書かれています。これらは三郎さんの子供の頃の体験に基づくものではないでしょうか。「目ぐすり」はどこか滑稽ながら、読み終わった後に暖かさが残る作品です。集まったメンバーの中から「誰も悪い者がいなく、ホッとしますね。」との声が上がりました。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日）に刈谷市中央図書館で開催

平成30年12月14日（金）午後1時半～3時半

「一片のバイ」「誓（かんざし）」（『森三郎童話選集かささぎ物語』）